# 生きてこそ…

『母べえ』
2007年　松竹映画　132分
監督・脚本／山田洋次　原作／野上照代
主演／吉永小百合、坂東三津五郎、浅野忠信、
　　檀れい、笑福亭鶴瓶、中村梅之助
2008年1月26日公開

『ALWAYS 三丁目の夕日』正・続の両作は、高度成長期に突入する時期の東京の風景をCGを駆使して鮮やかに再現していた。観客をノスタルジックな気分に駆り立て、そこから温かい人情話が紡ぎ出される。ところが、劣らず製作費をかけたと思われる『母（かあ）べえ』は、戦中の新宿の街の雑踏や、都電が走り自動車が輻輳する大通りを映すことにほとんど関心を示していない。「えっ、これが昔の新宿なのか？」といぶかしく思うほど、そっけない質素なセットなのである。

1941年、日本が太平洋戦争に突入していった時代の、東京山の手のつましい家族の物語を、ほとんど小さな家の中とその周辺を描くだけのドラマに仕立てている。だがCGなどに力をそそがなかった分だけとでも言おうか、中身はみごとに濃いものであり、人と人とが肩寄せ合って生きる匂いまでが見る者に伝わってくるほどリアルに、当時の人々の生活とその周辺の細部が平易な楷書的映像で再現されている。

夫「父（とお）べえ」（坂東三津五郎）が治安維持法で逮捕された、その留守家族の物語である。娘2人に妻「母べえ」（吉永小百合）が、夫の妹（檀れい）と夫の弟子の山ちゃん（浅野忠信）に助けられて、非国民の家族という冷たい目の中で健気に生き抜いていく。戦争にはほとんど無関心な無頼とも言える個人主義者である母べえの叔父（笑福亭鶴瓶）の姿も画面に彩りを添える。吉永の好演あってこその作品であるが、鶴瓶の存在感も貴重である。

悪法の犠牲になる夫の反戦の理論を大きく描き出すわけではないし、天下国家を論じたりもさせない。政治や社会の大状況に真正面から立ち向かったりはしないのである。戦闘シーンなどとはむろん無縁であり、逆に戦意高揚の側の声を強調したりもしない。

ところが、笑いと叙情に包まれたかのような小さなドラマの後ろに見えてくるのは、とてつもなく大きな状況である。日常や家族の描写が緻密でリアルであるほど、のっぴきならぬ戦争に突入していく日本国の悲しい姿が浮かび上がる。

『男はつらいよ』にしてもいっけん浮世離れしたフーテン男との物語でありながら、比喩的に言えば、だんご屋の茶の間からは常に開け放された表通りを通じて実社会が透けて見えた。小さな家族は大きな世の中と直結しており、不況や離婚や進学や家出やといった社会の出来事の余波がだんご屋に持ち込まれてきた。高度成長に背伸びする日本の社会がじわりと見えて、そんなに急いでどこへ行くというスローライフのメッセージが観客に届けられたのである。『母べえ』もそれと似ている。ミクロの世界を直視することでマクロの何たるかを推し量ることができる。

夫が獄死して数十年を経た現代、『母べえ』はいま年老いて臨終の床にある。彼女は成長した娘に最後の力を振り絞って言う。「あの世でなんか会いたくない。生きてる父べえに会いたい」。戦争や軍国主義を告発する言葉の何倍もの力で、生きてこそと願う山田洋次の平和への気持ちが伝わってくる。

プロフィール
吉村　英夫（よしむら ひでお）
1940年生まれ。映画評論家、愛知淑徳大学教授。早稲田大学卒業後、三重県立高等学校で教鞭を執る。34年の教員生活を経て退職、現在に至る。著書に『完全版男はつらいよの世界』『老いてこそわかる映画』などがある。近刊に『吉村英夫講義録　チャップリンを観る―そして「ローマの休日」へ』